

「縮図」③

報告者：西澤忠志

1. 梗概

本章は、加藤周一が第一高等学校（以下、一高）に在学した最後の期間である3年生（1938～1939年）の時期に起きた一高寄宿寮内での出来事と、それに対するインテリ（一高生）たちの態度を通じて、一高寄宿寮をインテリと同時代の社会とが乖離、あるいは対立する「縮図」として描写している。加藤周一が在学していた昭和10年代の一高生は、同時代の社会情勢と距離を置きつつ、自身の信念に基づいて社会で使われていた言葉を論じる、独立した気風を持っていた。これはマルクス主義に代表される、同時代の「世界（より正確に言えばヨーロッパ）」とつながりを持っていた文芸や思想を受容することによって得たものである。こうした態度は同時代の社会とのつながりを断ったうえで行われたものではあるが、同時代の社会で使われていた言葉を「正確に」見定めようとする上では大いに役立った。これが実践されたのが、政府による戦時標語に対する態度や横光利一との座談会においてである。

加藤はこれらの体験を通じて、思想的根拠を持ったうえで、その言葉を正確に理解しようとする、同時代の社会を外から論じる際の視点（「高みの見物」）を得た。それと同時に、加藤は自身の思想と社会とのズレを自覚することとなった。

2. 全体の構造

- ・「駒場」～「縮図」…1936年4月～39年3月、一高理科乙類に在学中（17～20歳）
- ・「二章ごとに関連のある話題が取り上げられている」という視点に従えば、
 - ・「高原牧歌」…軽井沢（追分）で過ごす人々
 - ・「縮図」…東京（第一高等学校）での学生たち→いずれも、**同時代の社会と距離をとった同年代の人々**
- ・「駒場」「戯画」「縮図」までの一高での生活を記述した中での位置づけ
 - ・「駒場」…庭球部に所属していた時期の生徒（上級生）とのつながり（1、2年生）
 - ・「戯画」…教師とのつながり（1～3年生？）
 - ・「縮図」…文芸部に所属していた時期の生徒（同級生）とのつながり（3年生）→より親しい人々とのつながりに、**視点に移る**
- ・書誌情報
『朝日ジャーナル』9巻7号（1967）112-117頁
『羊の歌』（旧版）148-160頁
（新版）167-181頁

質問への回答

「日本の教育についての加藤の考えについて知りたい。ぜひ論文名を教えてください。」

→ (単行本で読むことができるものに限定、新聞・講演にも教育を題材にしたものあり)

- ・「信州旅日記——英語教育に対する疑問」(1955)、『加藤周一自選集 2』に所収
- ・「松山の印象——民主教育の問題」(1956)、『雑種文化』講談社文庫に所収
- ・「日本の英語教育」(1956)、『加藤周一自選集 3』に所収
- ・「座談会 文学と教育」(猪野謙二、桑原武夫、暉峻康隆、竹内好)『文学』第 28 巻第 10 号 (1960)
- ・「今日における芸術教育の意味と問題」『岩波講座・現代教育学 8』(1960)
- ・「座談会 国語教育への提言」(大村はま、金田一春彦、益田勝実)『文学』第 49 巻 (1981)
- ・「国語教育二点」『月刊国語教育』47 号 (1985)
- ・「読み書きそろばんこそ教育の原点」(1997)、『どんな人間がこの時代を生きぬくか：公文毅対談』
- ・「(夕陽妄語) 再び英語教育について」(2000)、『夕陽妄語 2』(ちくま文庫) に所収
- ・「憲法・文化・教育」(2002)、『加藤周一講演集 5』に所収

「下線部の「生活とは別に、学問や文芸を考え、みずから好むところへ赴くのに、」の部分は、私の読んでいる『羊の歌』旧版(第 10 刷)(149 頁)では省略されておりませんが。」

→ 発表者の確認ミスでした。御指摘していただきありがとうございます。

「京都学派の定義ですが、広義的に西田に学んだ師弟と捉えると西澤さんから説明ありました。それで、レジュメには三木について「京都の哲学者」とあったのだと理解できました。ただ「学派」とある限り、理論的に戦争美化(加担)した者とそうでない者は分けてもいいのではと個人的に思います。三木清や戸坂潤も「学派」に含めることに抵抗を覚えます。加藤先生はどのような捉え方をしていたのでしょうか？」

- ・戦争を理論的に美化した人々(田辺元、西谷啓治、鈴木成高)は「京都学派」にまとめられているが、三木清は戦後直後に獄死したことから、彼らとは別に語られている¹
- ・『日本文学史序説』の記述
 - ・マルクス主義に影響を受けた西田幾多郎門下の一人として三木清が出てくる²。戸坂潤への言及なし
 - ・「京都学派」は西田幾多郎ほど人格と現実とが接近しなかったと評価しているが、その範囲について言及なし³

→ 「京都学派」(田辺元、西谷啓治、鈴木成高など)と三木清で区別している？

- ・三木清に対する加藤の評価が読み取れるのは、丸山眞男、久野収、谷川徹三、日高六郎との座談会「三木清を語る」(初出『図書』1966年10月号、『対話集 2』に所収)
- ・三木清の思想的変遷が「体系的思考の伝統の欠如という日本的な条件」によるものとみなす⁴

¹ 加藤周一「戦争と知識人」『近代日本思想史講座 第 4』筑摩書房(1959)〔『加藤周一自選集 2』(2009) 401-402 頁〕

² 加藤周一『日本文学史序説 下』筑摩書房(1999) 312 頁

³ Ibid., 312 頁

⁴ 加藤周一、丸山眞男、久野収、谷川徹三、日高六郎「三木清を語る」『加藤周一対話集 2 現代はどう

凡例

引用史料中の下線部は、すべて発表者によるもの

一重線は一高生、二重線は横光の発言、波線は地の文で重要な場所を示す

3. まとめ

第1パラグラフ（旧版148頁、改版167～168頁）…大多数の一高生の動向

第2パラグラフ（旧版148～149頁、改版168～169頁）…少数の一高生（加藤も含む）の動向

第3パラグラフ（旧版149～150頁、改版169～170頁）…同時代の社会と一高生とのズレ

第4パラグラフ（旧版150～151頁、改版170～171頁）…同時代の社会に対する少数の一高生の反応

第5パラグラフ（旧版151～152頁、改版171頁）…横光利一の語り口に対する加藤の反応

第6パラグラフ（旧版152頁、改版172頁）…「科学」を切り口にした、座談会の始まり

第7パラグラフ（旧版152～153頁、改版172～173頁）

「ぼくは横光さんの科学というのが、よくわからない」とまた別の一人がいった、「物理学者が主人公になっている短篇がありますね、あのなかに数式が書いてある、あれは式のなかの文字が何をあらわすのかというただし書きがないと、意味がないわけですね、どういうわけであれを……」「ぼくは物理学者じゃない」と横光氏は切捨てるようにいった、「あれは文学的象徴です」。しかし質問をはじめた学生はひるまなかつた。「しかしですね、あの数式はあのままでは意味をなさない。あれでは科学を象徴することにはなりませんよ」「だから文学的象徴だといっているのだ」「では、文学的に、あれが一体何を象徴しているはずなのですか」「君たちのように理くつで押しているだけでは文学はわからん」「そうかもしれません。いやそうでしょう、しかし横光さんは、物質文明とは科学だといわれる。科学をもち出されたからいいですが、あれでは科学とは何であるか、失礼ですけれど、初歩的なところで横光さんにはわかっていないと思う。科学というのはですね……」。

● 横光と「科学」との関わり

背景…関東大震災をきっかけにした東京の都市化と科学技術による生活の変化

アインシュタインの来日による相対性理論ブーム

→人間の心理や主観を自然科学的に認識・表現しよう⁵、片山正夫⁶『化学本論』、石原純による

アインシュタインの紹介論文を元に、「メカニズムの文学」を主張（但し、非常に曖昧な概念に）⁷

『この時代か』かもがわ出版（2000）171頁

⁵ 河田和子「科学と文学」『横光利一の文学世界』翰林書房（2006）198-201頁

⁶ （1877-1961）物理化学者。東京帝国大学理科大学化学科卒業。1905～1909年ヨーロッパ留学。1911年、東北帝国大学理科大学教授、物理化学講座を担当。1915年物理化学教科書『化学本論』を出版。1919年東京帝国大学に転任。1920年代後半に量子化学が生まれるといち早くそれを紹介した。

内田正夫「片山正夫」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-02-16)

⁷ 山本亮介『横光利一と小説の論理』笠間書院（2008）56-64頁

● 横光が言うところの「文学的象徴」

例：「園」（1925）…肺結核に冒された物理学者が「自分の死後の靈魂が木星の大赤点へ到着する時間」を測定するために、靈魂の速度を計算する場面で数式が出てくる。

ここでは、死後の靈魂の速度を計算すること自体がナンセンスであるため、物理学者が死の虚無に対して徒に抗っていることを象徴的に表そうと、数式がでたらめに書かれている⁸。

→科学で使われている言葉（数式）を文学内で使用することで、新たな表現を試みる

⇒横光と一高生との「科学」をめぐる認識のズレ

横光…数式を通じて、作品内の世界を表現

一高生…数式はある定理のみを示すだけ

隣室から妹の弱々しい聲がした。彼は黙つてボイルの法則にかちりついた。

$$P \cdot \frac{1}{1+mt} = \frac{P_0}{1+mt_0} \cdot \frac{1}{1+mt_0}$$
 「兄さん？」

$$\dots\dots\dots \frac{1+R_p}{1+R_{p0}} = \frac{1}{1+R_{p0}}$$
 「カーテンを開けてよ。」
 「待て。」

$$\dots\dots\dots \frac{a}{1+S} - \frac{a}{1+S} dt = -dS \left(\frac{a}{1} \right) dt = adS \dots\dots\dots$$
 「もうお日様が這入るでせう。」

「園」『定本 横光利一全集 2巻』河出書房新社（1987）160頁→

第8パラグラフ（旧版152～153頁、改版173頁）

「それをいい出したらきりが無いよ」と傍から割って入る者もあった。しかしそれは横光氏を救うためではなくて、あらためて追及するためであった、「科学とは何であるかということ」を別にしても、それが人間の精神活動のひとつであることはあきらかでしょう。とすれば、科学と精神文明とを対立させて考えるのは、まちがいでないですか。

● なぜ「科学と精神文明」との関係が論点に出たのか？

・昭和時代の「科学」観

① マルクス主義を中心とする「社会科学」の受容

・1917年ロシア革命、1922年ソ連の成立をきっかけにマルクス主義への関心が高まり、その中で科学論が注目され、多くの人々に論じられる

・内容：自然から社会が生まれたことを前提に、社会や歴史を支配する法則を自然から導く、あるいは自然科学と社会科学とを連携させることで、革命に科学的根拠を与えようとする⁹

⁸ 河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉横光利一と保田與重郎』花書院（2009）88頁

⁹ 岡本拓司『近代日本の科学論：明治維新から敗戦まで』名古屋大学出版会（2021）175頁

② マルクス主義を中心とする「社会科学」に対抗する動き

例：1932-33年の国民精神文化研究所での議論¹⁰

- ・科学＝西洋文明の物質性・一面性⇔日本・東洋文化の有機性・全体性¹¹

⇒「科学（＝西洋）」と「精神文明（＝日本・東洋）」とを対立するものとし、それを乗り越えようとする
「近代の超克」でも議論

③ 「科学」の中に日本精神を入れる動き¹²

例：1935年の橋田邦彦¹³…科学者は人である以上、精神性や道徳が成果に関わる

科学者は人である限り「道」を求めざるを得ず、その中身を探るのには、
儒教・仏教の知見が必要

- ・前提：日本人による学問と西洋人による学問とを分け、西洋では固定化された全体をみるが、
日本では全体の動き（世界のあるがまま）を見る

→自然科学と「日本精神」とが関連するものとみなす

● その中での横光の科学に対する問題意識…『機械』（1930年発表）を期に変わる

- ・初期…科学への興味、関東大震災以降の都市社会の発達、既存の文壇に対抗するための理論武装¹⁴
マルクス主義に対して自然科学の概念で対抗しようとする¹⁵

- ・『機械』以降…自然科学の限界性を意識したことから、科学に対し懐疑的な姿勢を示す

→文学者の立場から、西洋由来の科学や科学精神（科学的合理主義・実証主義）を批判的に克服し、
合理主義的枠組みでは捉えきれない文学独自の領域を見出そうとする¹⁶

⇒一高生の意見は、科学＝西洋、精神文明＝日本とする、日本の科学論&横光の見方を受けてか

¹⁰ 第二次世界大戦前における文部省直轄研究所の一つ。1932年設立。「学生左傾」の対策として、国体・国民精神の原理を明らかにし、マルキシズムに対抗する理論体系の建設を目標とした。

田中久夫「国民精神文化研究所」『国史大辞典』（JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>）, (参照 2022-01-28)

¹¹ 岡本拓司『近代日本の科学論：明治維新から敗戦まで』名古屋大学出版会（2021）260頁

¹² Ibid., 285頁

¹³ （1882-1945）生理学者、教育行政家。東京帝国大学医科大学を卒業、生理学を研究。1914年ドイツ、スイスに留学。1937年に第一高等学校長、1940年に文部大臣に就任。国民学校令の公布、『臣民の道』の刊行、「戦時家庭教育指導要項」や中学・高校の年限短縮決定など、第二次世界大戦中の教育行政を担当した。戦後、戦犯の容疑を受け服毒自殺。

大鳥蘭三郎「橋田邦彦」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-01-17)

¹⁴ 山本亮介『横光利一と小説の論理』笠間書院（2008）47-48頁

¹⁵ Ibid., 49

¹⁶ 河田和子「科学と文学」『横光利一の文学世界』翰林書房（2006）201頁

第9パラグラフ（旧版153頁、改版173～174頁）

横光氏はしばしば答を探している暇がなかった。私たちは、仲間の間でも議論をはじめていたからである。「横光さんが物質文明といわれるのは、科学の対象が物質だということだろう」「おい、待てよ、自然科学だけが科学ではないぜ」「だから横光さんのいう科学は、自然科学なのだよ。問題はだ、人文科学も西洋で発達して、それがこの国へも入ってきたということじゃないか」「どっちにしても、西洋の物質文明というのはおかしいね」「それより西洋の物質文明というときに、基督教がどういふことになるのか、その方が問題だろう」「もちろんさ。それからプラトニズム、デカルト……つまり東洋にしか精神文明がないというのは、事実と反するわけだ。そもそも物質文明とは一体何を意味するのか……」。

● 昭和時代の一高内での「科学」への言及

① 「科学」への興味¹⁷

例：1919年、一高社会思想研究会が組織される

1936年、理論物理学者・歌人の石原純を招いて、「現代と科学的精神」の題で講演会を開催

② 「科学」と日本文化との接続に関する議論…1936年に就任した橋田邦彦校長が主張

例：橋田邦彦「日本文化としての科学」『校友会雑誌』第359号（1937）

→「日本人」という立場に立ち、人文・自然科学に携わることを求める¹⁸

一高生からは反発する動きも（例：中村眞一郎）

例：美土路達雄¹⁹「文学の科学的考察」『向陵時報』昭和12年2月1日号（1937）

・プロレタリア文学と批評を通じて、「社会科学」に基づく文学、批評が可能かどうかを探る

⇒「科学」に対する関心の強さから、横光の言うところの「科学」の内実が議論になる

あるいは、議論の混乱を表現することで、横光の言う「科学」の内実が曖昧であることを示す？²⁰

第10パラグラフ（旧版154頁、改版174頁）

「物質文明というのはだね」と横光氏はいった、「近代の物質偏重のことを、ぼくは知っているのだ。日本もこの《近代の毒》におかされてきたのです。だからこの厳しい時代を生きぬくために、われわれ文学者が召されているとぼくは思っている。その毒から日本を清める。—これが《みそぎ》といふことのほんとうの意味ですよ、《みそぎ》の精神は、民族の心だ。今のこの時代ほど、偉大な時代はない。今こそわれわれは日本文学の伝統に還る……」。

¹⁷ 岡本拓司『近代日本の科学論：明治維新から敗戦まで』名古屋大学出版会（2021）319頁

¹⁸ Ibid., 319頁

¹⁹ （1917-1992）農業経済学者。農産物市場論において市場構造分析の基礎を築き、農協の経営主義を批判した。「美土路達雄」『日本人名大辞典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照2022-01-17)

²⁰ 加藤夢三『合理的なものの詩学』東京：ひつじ書房（2019）165頁

● 「みそぎ (禊)」の意味²¹

- ・川や海の清い水につかり身体を洗いそそぎ、ツミヤケガレをはらい清めること

● 戦中期の「みそぎ (禊)」²²

- ・昭和時代に入ると総力戦体制に移行する中で、戦時下の国民形成を目的に教育界で採用される
- ・1941年：大政翼賛会が短期間に国民を一体にする「日本的にして最良の方法」として採用
指導者養成のため、錬成講習会を5月～9月にかけて開催
その後、中央、地方各地の道場で開催

● 横光にとっての「みそぎ」

- ・横光の古神道への傾倒…明治以降の急速な近代化の中で、明治以前と以後の断絶を克服しようと、
文学や生活を日本の伝統に根付かせようとする²³

- ・きっかけ：1941年8月2日から5日間、箱根湯本で開催された大政翼賛会主催の「みそぎ」に参加
体験談を『朝日新聞』、吉川英治との対談で語る

「体験してみねば判らないといふことがよく判つた、最も強く感じたことは何もかも忘れてしまふことです²⁴」「『みそぎ』の精神というのは、朗々たる、春風駘蕩の精神ですね。万葉集の精神ですからね。外国から入ってきたものも生かすという精神があるのですよ²⁵。」

→経験に基づく論の立て方

「伝統」＝「無の精神」(他国の文化や伝統を融合統一)＝「みそぎの精神」²⁶

古神道による西洋科学や科学精神の「日本化」により、西洋近代の行き詰まりを乗り越えようとする
作品(『旅愁』)でも「みそぎ」に関する議論が取り上げられる

● 『羊の歌』での横光の「みそぎ」

- ・物質文化を重視する「近代の毒」を祓い「民族の心」を持つものとして書かれる

⇒同時代の日本に関わる思想の排他的性格を表現する？

²¹ 佐野和史「禊」『日本大百科全書(ニッポニカ)』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-01-17)

²² 岡市仁志「昭和前期における禊祓行の受容過程：大政翼賛会の国民錬成を中心に」『神道宗教』245号 43-70

²³ 河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉横光利一と保田與重郎』花書院(2009)76頁

²⁴ 「掴んだ真精神 体験者の話し」『東京朝日新聞』1941年8月4日、5頁

²⁵ 横光利一、吉川英治「日本の精神」『文芸』9巻10号(1941)〔『定本 横光利一全集』(1983)570頁〕

²⁶ 河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉横光利一と保田與重郎』花書院(2009)76頁

²⁷ Ibid., 128頁

「どういう伝統ですか」と一人がいった。そして横光氏の答えないうちに、別の誰かがすかさず「化政の江戸……」と半じょうを入れた。それを聞くと、横光氏は爆発した。声の方をふり向くや否や、大喝した、「そんなことをいうから君たちはだめなのだ」。

● 原田義人²⁸の回想²⁹

(氏＝横光利一、K 君＝加藤周一)

——我国にも、政治といふものが民衆の間にすっかり浸透した時代がある

往々氏は聴き手に考えることを求める。しかしこの謎と暗示とは確かに度を超していた。K 君には氏の手が見え過ぎたのだ。そして遮るように言った。

——幕末ですか。

——ずっと新しい。

——明治のある時期ですか。

——いや、もっと新しい。(と氏は厭な顔をされた。)

(……)

——日本とフランスとでは随分ちがう。フランスでは文化とか文学が、広く大衆の間に入り込んでい
るからね。私はパリで女中がジイドを読んでいるのを見た。

K 君は微笑んだ。この発言の無意味であることは明らかだった。

——そんな時代が我国にあるとすれば、それは文化文政の頃ぐらいのもですね。

氏は明らかに不快感な表情をされた。

⇒議論の内容は異なるが、文化文政(化政文化³⁰)を挙げたことに横光は不快感を示す

● なぜ横光は「化政の江戸」で怒ったのか？

- ・横光にとっての「日本の伝統」…万葉集までに至る、他国の文化や伝統を融合統一するもの
(「化政文化」については特に言及なし)

²⁸ (1918-1960) 昭和時代後期のドイツ文学者。1948 年に加藤周一らと『方舟』を発行、編集を担当。1954 年ハンブルク大日本語講師としてドイツに渡る。カフカらに関心をもち、ドイツ現代文学を紹介した。「原田義人」『日本人名大辞典』(JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, 参照 2022-01-19)

²⁹ 原田義人「SOUS RIRE：回想の横光利一氏」『文芸』第 5 巻第 4 号 (1948) 43 頁

³⁰ 文化・文政 (1804～1830) ころの江戸中心の町人文化。その中心は小市民的な合理主義や美的情緒であるが、幕藩制社会の弛緩の時代にあたるため、生活的・娯楽的要素が強いとともに、政治的・批判的要素を含むのが特色。十返舎一九『東海道中膝栗毛』などの滑稽本、伝奇の世界を創造した上田秋成『雨月物語』、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』、封建政治批判の役割を果たした山片蟠桃『夢之代』による仏儒教学的権威批判、本居宣長『古事記伝』などによる国学の思想的構築などの動向があった。高尾一彦「化政文化」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』(JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, 参照 2022-01-19)

・化政文化に対する同時代評価

① 一部の東京出身の文化人による「趣味」（「江戸趣味」）として受け入れられる

例：永井荷風…幼少期から江戸の戯作文学に親しんでいたが、関東大震災とその復興（都市化）により江戸以来の景観が失われたことから、化政文化期の漢詩を参照し、江戸の景色や情緒を描きだそうとする³¹

② 否定的評価

例：永井一孝³²『江戸文学史』（1935）…熱烈を欠いた「消極的文学」という評価³³

→「江戸」を故郷とする人々にとっては、化政文化は戻れる「故郷」

そうではない人々にとっては、（化政文化の時代と併せて）否定されるべき対象

第12パラグラフ（旧版154～155頁、改版174～175頁）

講演を頼みにいったのは私であり、その座談会には司会者というものがなかったけれども、いづらか主催者の役割を意識していた私はそのときまで黙っていた。しかし横光氏の一喝は、私を興奮させた。たしかに「化政の江戸」は、毒を含んだ皮肉にちがいない。しかしそれは少くとも権力を後楯にしたものではなかった。私たちの立場は、たとえ機会があたえられたとしても、駒場の寮の外では、もはや公言することの憚られるような立場であった。横光氏の立場は、本人自身が権力にへつらうことを目的としてはいなかったにしても、軍国主義権力が承認し、歓迎するものであった。議論をうち切つて、大喝一声することは、横光氏にはできても、私たちにはできない。「だまれっ」ということは、軍人にはできても、代議士にはできない。相手が決して怒鳴ることのできない条件のもとで、怒鳴るのは《フェア》でないだろう。本人の主観の如何を問わず、事実上、権力をかさに着のと同じことではないか。「君たちはだめだ」などと思いついたことをいうな。—私は内心あまりに勇みたため、学生を相手にしてほんとうに怒ることができるほど横光氏が誠実な人であったということ、また弱点を指摘され激怒したこと自身が、その弱点の自覚の証拠であったかもしれないということなどを、想像してみる余裕は全くなかった。

● なぜ加藤は横光の一喝に興奮したのか？

・座談会での権力関係…対立的

権力を後楯にせず軍国主義権力から発言が歓迎されない一高生



軍国主義権力が後楯になり、それらから歓迎される横光

³¹ 合山林太郎「江戸漢詩の名所詠と永井荷風」『好古趣味の歴史：江戸東京からたどる』文学通信（2020）227

³² （1868－1958）明治-昭和時代の国文学者。東京専門学校文学科卒。訓詁学を学ぶ。早大高等師範部教授を務めた。「ながい-ひでのり【永井一孝】」『日本人名大辞典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-02-16)

³³ 永井一孝『江戸文学史』敬文堂書店（1935）356頁

「だまれっ」ということは、軍人にはできても、代議士にはできない。

- ・ 国家総動員法（1938年制定）の審議中に起きた「黙れ事件³⁴」を前提にした既述か
→ 日中戦争が長期化する中で、軍部の議会に対する高圧的姿勢が強まったことを象徴する事件³⁵
同時代の政治的風景が、横光との座談会と重なる

相手が決して怒鳴ることのできない条件のもとで、怒鳴るのは《フェア》でないだろう。本人の主観の如何を問わず、事実上、権力をかさに着るのと同じことではないか。

- ・ 相手と「フェア」であることへのこだわりは、「駒場」でも触れられたとおりの
庭球部での「フェアプレイ」への言及（旧版120頁）が、「縮図」でつながる

- ・ 「怒り」はその事象に対して真剣な態度を示す証拠でもある

加藤周一が「怒り」をもって語った事例…太平洋戦争に関わること

太平洋戦争は多くの日本の青年を殺し、私の貴重な友人を殺した。私自身が生きのびたのは、全く偶然にすぎない。戦争は自然の災害ではなく、政治的指導者の無意味な愚挙である、と考えていた私は、彼らと彼らに追随し便乗した人々に対し、怒っていた。その怒りは、しばしば性急な形で、憎悪・軽蔑・弾劾として、九つの文章のなかにぶちまけられている。(……)『1946 文学的考察』は、私にとって、何よりも怒りの抒情詩であった³⁶。

³⁴ 1938年の衆議院における国家総動員法案の審議に際して、政府説明員の佐藤賢了陸軍中佐が議員を「黙れ」と怒鳴りつけて問題となった事件。国家総動員法案は軍部、とりわけ陸軍の強い要望によって、企画院が立案し、衆議院に提出された。しかしその内容が、戦時の際に法律ではなく勅令によって国民生活の諸分野を統制できることになっていたため、立憲政友会・立憲民政党や財界の間に、憲法を無視し議会政治・自由主義経済を否定して、全体主義・社会主義への途を開くものであるとする強い反対があり、衆議院での法案審議は難航した。同年の衆議院国家総動員法案委員会で、政府説明員として佐藤（陸軍省軍務局員）が約30分にわたって答弁したが、宮脇長吉・板野友造議員らから佐藤の発言内容が単なる説明を逸脱した討論にわたるものとして、「止めた方が穏かだ」などと野次られたため、佐藤は「黙れ」と彼らを叱咤した。両議員らの抗議で議場は紛糾し、佐藤はこれを取り消したが、混乱のまま委員会は散会した。議員側は、議会議場を冒瀆する暴言として政府に善処を求め、翌日の委員会で陸軍大臣杉山元が遺憾の意を表明して問題は解決をみた。

鳥海靖「だまれじけん【黙れ事件】」『国史大辞典』 JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-02-16)

³⁵ 鳥海靖「黙れ事件」『国史大辞典』 JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-02-16)

³⁶ 加藤周一「追記」『加藤周一著作集 8』（1979）86頁

「だめなことはないでしょう」と私は声をしずめていった、「文学芸術の趣味は、化政の江戸で洗練の極に達していた。それはほんとうの《伝統》ではないというわけですね。しかし元禄一とって見たところで、代り映えもしないではないですか。元禄振りと《みそぎ》とは何の関係もない。平安朝の物語、いや、万葉集までさかのぼっても同じことだ。なんですか、一体、その万葉・源氏・西鶴・近松と全く関係のない日本文学の伝統というのは」。

● 加藤の1967年までの日本文学の「伝統」観

例：「日本文学の伝統」（1947）³⁷…日本文学の「伝統」について書いたものの中では一番古いもの？

- ・ナチスと対立した哲学者ヤスパースが、「カントやゲーテやレッシングの遺産に忠実であれと言った」ことを受け、ドイツ精神・文学との伝統は「偏狭な国家主義に対立することによって見出される。」
- ・ここから、日本も同様に「国家主義に強く対立すればする程、我々は日本の文学の伝統を正しく理解するであろうし、我々が外国文学に傾倒すればする程、我々は日本の文学の伝統を身につけることが出来るだろう」とする
- ・「文学的伝統」の主軸を、『古今和歌集』に代表される抒情詩（和歌）、『万葉集』～江戸の漢詩人までの「外国文学の決定的影響の歴史」とする

→抒情詩と外国文学を軸とする「日本文学の伝統」

1966年には、「外国から輸入された世界観、価値体系」と関わる／関わらない流れとして整理³⁸

⇒『万葉集』から直接つながる横光の「みそぎ」の精神とは異なり、

「外国文学（思想）」という参照軸から見た歴史の変遷として、「伝統」をとらえる

³⁷ 加藤周一「日本文学の伝統」『東京新聞』1947年12月3日2頁

³⁸ 加藤周一「日本文学の伝統と「笑い」の要素」『世界』250号（1966）〔『加藤周一自選集3』岩波書店（2009）385頁〕

「横光さんは、《ヴァレリーもフランスでみそぎをしている》といわれましたね。あれはどういう意味ですか」と別の男はいった。「密室の思想がみそぎに通じるという意味だ」「そんなことはないでしょう。《海辺の墓地》の風とおしはよいですよ」「ぼくは《テスト氏》のことをいっている」「いや、そうでしょう。そうでしょうが、みそぎと関係はないですね。一体みそぎといわれるのは、本気ですか」「本気ですかとは何だ」という横光氏の声は怒りにふるえだした。「あまりとりとめがないから、本気ですか、とிட்டのです」「つきつめた考えは、すべてみそぎに通じるのだ」「冗談じゃない、みそぎは考えではなくて、儀式ですよ」「君たちはぼくの言葉尻を捉えてばかりいる、けしからんよ、そんなことは」「けしからんということはない、横光さんも文学者じゃないですか。文学者は言葉の専門家です。言葉尻をとられるようにしか言葉を使えないとしたらそのこと自身が致命的ではないですか」「ぼくはもう帰る」と横光氏は怒鳴った。「実に不愉快だ、こんなことはじめてだ」「それはそうでしょう」と私は、そのときに再び介入していった、「駒場ではみんなが考えを自由に話しますからね。念のために、《みそぎ》についてつけ加えれば、みそぎと関係があるのは、ヴァレリーではなくて《金枝篇》でしょう。みそぎとか、祓いとか、それに類したことは、なにも日本にかぎったことではない、原始的な部族の宗教にはいくらでもあることです。アフリカや東洋の《精神文明》を理解するには、少くとも《日本浪漫派》の《慟哭》よりも役に立ちますよ。それで一体西洋の《近代》を《超克》できるものかどうか。人間宣言以後百五十年、今どき《みそぎ》だの《神国》だのといいたすことが時代錯誤でないかどうか……」。

● 横光の言うところの「ヴァレリーもフランスでみそぎをしている」

（原田の回想での横光の発言…「ヴァレリイはパリでみそぎをしてゐる³⁹⁾」)

- ・横光のヴァレリー受容⁴⁰⁾
 - ・1929年に河上徹太郎の訳による⁴¹⁾「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法論序説」を読む
 - ・あらゆる自明と思われる事象を疑うことを通じて、そこから自意識や「虚無」を発見する思考として、ヴァレリーを受容⁴²⁾し、これを乗り越えようと苦闘する
- ・ヴァレリーの「密室の思想」を説明する際に、なぜ「テスト氏」を挙げた？
 - ・「テスト氏」（原題 *Monsieur Teste*）…1896年から発表された一連の小説
 - ・ヴァレリーの理想像であるテスト氏と語り手との、劇場での対話を中心とする
 - ・理想的人物を描きだしたことで、内面的な青春の危機を乗り越える⁴³⁾
 - ・1932年に小林秀雄の訳⁴⁴⁾で出版

³⁹⁾ 原田義人「SOUS RIRE：回想の横光利一氏」『文芸』第5巻第4号（1948）42頁

⁴⁰⁾ 山本亮介『横光利一と小説の論理』笠間書院（2008）79-83頁

⁴¹⁾ 「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法論序説」『白痴群』2号（1929）

現在では、河上の訳文は、意味の通らない部分や誤訳が散見される文章と評価されている。

⁴²⁾ 山本亮介『横光利一と小説の論理』笠間書院（2008）98頁

⁴³⁾ 清水徹『ヴァレリー』岩波書店（2010）50頁

⁴⁴⁾ 『テスト氏 第1（テスト氏との一夜）』江川書房（1932）

原田の回想での横光の発言…「ヴァレリイは、仕事をするとき、部屋の外から鍵を懸けて、やるそうだ。

私は、それを聞いたとき、ヴァレリイという人がわかった⁴⁵。」

→横光…思想家としてヴァレリーを評価

● なぜ「密室の思想」に対して、一高生は『海辺の墓地』を挙げたのか？

・「海辺の墓地」(原題 *Le Cimetière marin*)

生まれ故郷、南仏地中海沿岸部に位置する町セートにある墓地を題材とする、1920年に発表された詩⁴⁶

鳩の群が歩いている この静かな屋根は、
松の樹間、墓石の並ぶ間に、脈うっている。
「午」の極は ここに今 火焰で海を構成する、
絶えず繰り返して打寄せる 海を
神々の静寂の上に 長く視線を投げて
おお 思索の後の心地よい この返礼⁴⁷。

・1929年に辰野隆と鈴木信太郎⁴⁸、中島健蔵⁴⁹によって紹介

⇒思想家としてヴァレリーを評価する横光に対し、一高生はあえて詩人としての側面を出すことで、ヴァレリーを「みそぎ」との関連から引き離そうとする
あるいは、思想家としてヴァレリーの側面しか知らない横光の知識の偏りを示すため？

● なぜ加藤は『金枝篇』(*The Golden Bough*)を例に挙げたのか？

・『金枝篇』…1890年に初版、1911年から36年にかけて決定版が刊行されたJ・フレイザー⁵⁰の著作

・イタリアに伝わる聖なる森の祭司職継承の伝説⁵¹を、世界中の神話、習慣、呪術的活動を参照して説明
人類の知的発展が呪術→宗教→科学へと進化的過程を経ることを主張

⁴⁵ 原田義人「SOUS RIRE：回想の横光利一氏」『文芸』第5巻第4号(1948)42頁

⁴⁶ 鈴木信太郎「ヴァレリー詩集 註」『ヴァレリー詩集』岩波書店(1968)347頁

⁴⁷ 鈴木信太郎(訳)『ヴァレリー詩集』岩波書店(1968)232頁

⁴⁸ 辰野隆、鈴木信太郎「ポオル・ヴァレリイの『海辺の墓地』(ギュスタヴ・コオアン)」『仏蘭西文学研究 第7輯』(1929)

⁴⁹ フレデリック・ルフェバル、中島健蔵訳「『海辺の墓地』解案」『詩と詩論』5号(1929)

⁵⁰ (1854-1941) イギリスの古典学者、人類学者、民俗学者。古典学を学んだのちに人類学を志し、民俗学、神話学を専攻した。自分で調査地に赴くことはせず、世界各地の宣教師たちから集めた膨大な資料を比較整理して、呪術、宗教の起源とその進化を論じた。未開文化の風俗習慣、信仰を同時代の広範な知識人たちに知らしめ、大きな関心を引き起こしたフレイザーの存在は、思想史上において大きな意義をもつ。上田紀行「フレイザー (Sir James George Frazer)」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-02-08)

⁵¹ 森の中に1本の樹があり、祭司になろうとする者はその樹の枝を折り、前任の祭司を殺さねばならないという伝説

- ・しかし 1930 年代頃から、現地調査に基づかない資料を社会的・歴史的状況を考慮せずに示す方法や、記述の不正確さが文化人類学者⁵²によって批判され、現在ではその進化主義的学説は否定されている⁵³
- ・初出（『朝日ジャーナル』）では、『金枝篇』とフランスの社会学者デュルケーム⁵⁴を挙げている。

念のために、『みそぎ』についてつけ加えれば、みそぎと関係があるのは、Valéryではなくて Durkheimではないですか。みそぎとか、祓いとか、それに類したことは、なにも日本に限ったことではない、原始的な部族の宗教にはいくらでもあることです。『金枝篇』の材料をDurkheimが整理している、え、まだお読みになったことがない？アフリカや東洋の《精神文明》を理解するのは、少なくとも《日本浪漫派》の《慟哭》よりも役に立ちますよ⁵⁵。

- ・「戦争と知識人」では、デュルケームとレヴィ・ブリュール⁵⁶を挙げ、ヴァレリーと「みそぎ」との関連性を否定したと回想⁵⁷

われわれは、「ヴァレリーとみそぎとは何の関係もない、パリでみそぎに類することを扱っているのは、ヴァレリーではなくて、デュルケームやレヴィ・ブリュールの系統の学者であろう」といった。横光にはその意味は通じなかった⁵⁸。

⁵² エヴァンズ＝プリチャード (Edward Evan Evans-Pritchard 1902-1973) など

⁵³ 上田紀行「金枝篇」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』(JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, 参照 2022-01-19)

⁵⁴ (Émile Durkheim 1858-1917) フランスの社会学者。社会学の固有の方法の確立に努め、それに基づき分業、自殺、家族、国家、法、社会主義など当時の西欧社会の諸問題の研究や、社会生活の原型を求めての未開の宗教の考察などに取り組み、豊かな成果をあげた。宮島喬「デュルケーム」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-02-18)

⁵⁵ 加藤周一「羊の歌」『朝日ジャーナル』9巻7号(1967) 115頁

⁵⁶ (Lucien Lévy-Bruhl 1857-1939) フランスの哲学者、社会学者。デュルケームの影響を受けて、「社会学主義」の立場をとった。民族が森羅万象をいかに認識し、いかに分類しているか、いかに考えるかという研究領域を創始したといわれる。代表作『未開社会の思惟』(原題 *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures* 1910年刊) などにおいて、未開民族の思考様式(原始心性 *mentalité primitive*) は文明民族のそれと本質的に異なると論じた。現在では、未開人と文明人との間に本質的に異なる「心性」は存在せず、その違いはむしろ程度の違いであると考えられている。とはいえ、タイラーやフレーザーの人類学の個人心理学的な議論を批判し、集合表象の重要性を力説した点を評価しなければならない。吉田禎吾「レヴィ・ブリュール」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』(JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, 参照 2022-01-19)

⁵⁷ 一高在学時に加藤がレヴィ・ブリュールを読んだのかについては不明。しかし、*Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures* の邦訳(山田吉彦 訳『未開社会の思惟』小山書店 1935年刊)は既に出版されていたため、読める環境にあったことが考えられる。

⁵⁸ 加藤周一「戦争と知識人」『近代日本思想史講座 第4』筑摩書房(1959)〔『加藤周一自選集2』(2009) 400頁〕

- ・デュルケームを挙げたのは、宗教研究に社会学的方法を適用した『宗教生活の基本形態⁵⁹』（原題 *Les formes elementaires de la vie religieuse*, 1912 刊）を前提とした記述か？⁶⁰
- ・しかし、デュルケームは「『金枝篇』の材料を整理した」というよりも、自身の立場を明確にするためにフレーザーを批判する記述が多い⁶¹
（岩波新書版でデュルケームの名前を削ったのは、彼に対する理解が間違っていたため？）
- ・しかし、宗教を題材にして普遍的な大系を探ろうとする態度は、三者に共通
⇒個人の経験から、みそぎを「日本独自の文化」として特別視する見方への批判
『金枝篇』を例に挙げたこと…実際の生活と離れた立場から発言をする一高生の態度を示す？⁶²

第 15 パラグラフ（旧版 156 頁、改版 178 頁）

しかし横光氏は席を蹴って起つというのではなかった。そして、私たちは横光氏がそこにいる限り、食いさがることをやめなかった。次第に横光氏は沈黙しがちとなったが、私たちはその著作をよく知っていたので、怒りに青ざめた横光氏の考えを推察し、その考えを片端から粉碎することに全力をあげていた。一人が喋りやめて、一息つくかと思うと、次の一人がはじめる。

- なぜ一高生は、食い下がることをやめなかったのか？
- ・一高生の横光に対する興味…文学に興味のある一高生にとっては、
例：中村眞一郎の回想⁶³…「日本の本格小説の代表者」として尊敬される
しかし、『旅愁』で独自の東洋主義、超国家主義を展開したことに怒る
（一高生時代の中村…読者の一人⁶⁴であり「現代日本の所有する最大の主知主義作家」と評価⁶⁵）

⁵⁹ 山崎亮による訳（2014 年刊）を参照

⁶⁰ 一高在学時に加藤がデュルケームを読んだのかについては不明。しかし、*Les formes elementaires de la vie religieuse* の邦訳（古野清人 訳『宗教生活の原初形態』刀江書院 1930 年刊）は既に出版されていたため、読める環境にあったことが考えられる。

⁶¹ 例えば、デュルケームは『宗教生活の基本形態』の冒頭で、フレーザーは「宗教」という言葉を定義することなく議論を進めたため、デュルケームが対象とするオーストラリアの信念と儀礼（トーテミズム）が持つ、根源的に宗教的性格を見分けることが出来なかったと批判している。

エミール・デュルケーム、山崎亮（訳）『宗教生活の基本形態：オーストラリアにおけるトーテム体系』筑摩書房（2014）54 頁

⁶² 『金枝篇』に対する加藤の評価は断片的に残っている。例えば「天皇制について」（初出 1957 年）の中で、加藤はフレーザーが『金枝篇』で「原始民族の酋長」と天皇を比較していることを「誤解に等しい一面的な考え」と批判し、「原始民族」の感情と戦前戦後の天皇に対する国民感情との違いを明らかにする必要性を述べている。「天皇制について」『加藤周一自選集 2』岩波書店（2009）128 頁

⁶³ 中村眞一郎『戦後文学の回想 増補版』筑摩書房（1983）51 頁

⁶⁴ 一高生時代の中村眞一郎は、日記に横光利一の作品（『蠅』、『園』など）を読んだ感想を残している。中村眞一郎（著）池内輝雄、傳馬義澄（編）、荒川澄子、安西晋二、石井佑佳、岡崎直也、河合恒、北原泰邦（翻刻）『中村眞一郎青春日記』水声社（2012）87 頁

⁶⁵ Ibid., 337 頁

加藤も「青春ノート」に横光の作品をメモし⁶⁶、その中でも『機械』『旅愁』を評した文章⁶⁷を残している
→文学好きの一高生は読んでいた作家であり、同時代の文学界を代表する一人
同時代の文学界の代表者として、批判の対象となる（戦後も同様）

第16 パラグラフ（旧版 156～158 頁、改版 177～178 頁）

「西洋自身が《近代》の行きづまりを自覚しているのだ」と横光氏は書いていた。「だから日本でその行きづまりが打開されるということになりますか」「なぜならないのだ」「日本の行きづまりではないからです。近代社会が遠くの西洋で行きづまろうと、行きづまるまいと、日本は近代社会ではない、そんなことを心配するのは場ちがいではないですか。六八年の革命は、フランス革命ではなかった。この国の小作料は、おどろくなかれ、まだ物納ですよ、しかもそれが収穫の半分以上だ、一体どこに《近代的》な土地制度がありますか。労働人口の過半数が農村に集中している国で、封建的土地所有と零細農民の収奪を保存しながら、《近代》を語るのは無意味だと思う。いわんや《近代》を超えるの超えないのという議論は、滑稽そのものですね」「滑稽ではない」と横光氏は抗議したが、私たちの仲間は、もはや抗議を相手にもせず、自分の言いたいことを喋りまくった、「零細農民が封建的収奪のもとで窮乏化し、低賃銀労働者の供給源となる。それを足場にして膨張した日本資本主義にとって国内市場のせまいのは、当然ですね。《大東亜共栄圏》というのは、要するに、その当然の帰結としての大陸膨張ということにすぎない。植民地の独立解放？ 冗談じゃない、権力は英米の植民地を解放したいでしょうが、日本の植民地は決して解放しませんね。その証拠には朝鮮の独立ということはおくびにも出さない。それどころか矢内原忠雄が台湾・朝鮮の植民地政策を批判してさえ教壇を追われているではないですか。そこでもち出された《国民精神総動員》とは、誰が何のために、国民を動員しようとしているものなのか。それさえ見きわめずに、文学者が「ぼくは文学のことは知りませんが、文学者が、横光さん、《偉大な時代》とか何とかいうことがわかりませんね。なにが《偉大》ですか。あなた方がだまされているのなら、愚劣ですよ。だまされていないのなら、みずから魂を売りわたしているのではないですか……」。

- 一高生の意見…マルクス主義（講座派）、自由主義（矢内原事件）を背景とした批判
 - ・ 講座派、矢内原事件…前回のレジュメ 10 頁を参照
- ⇒同時代を「近代」とした上で、そこから乗り越えようとする「偉大な時代」とすると肯定する横光の意見に対する、マルクス主義（講座派）に基づく反発

⁶⁶ 「青春ノート」には、『横光利一全集』、『厨房日記』、『旅愁』などの作品名が書かれている。

加藤周一「〔スケッチは大切だ〕」『青春ノート 1』（1938-1939）（https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200010/seishun_note1/?p=4）

⁶⁷ 「追加覚書」『青春ノート 4』、「覚書 I」『青春ノート 7』

しかしその頃の私たちは、鷗外の筆法にならっていえば、あるいは荷風の壘によって、「文化文政」を引き、あるいは「金枝篇」の壘によって、「みそぎ」をあしらい、あるいは「講座派」の壘によって、「大東亜共栄圏」と「聖戦」を批判していたにすぎない。そのとき横光氏には、徒手空拳、抛るべき堡壘が、文壇の名声と、権力のつくりだした時流以外には何もなかった。信念——それにちかいものはあったかもしれない。しかしほんとうに信じていることと、信じていると信じようとしていることとは、ちがうのであり、誰よりも横光氏自身がそのちがいを感じていたにちがいない。

● 構造

何らかの根拠に基づいた学生 ⇔ 一時的な時流に基づいた横光

● 一高生が抛っていた「壘」

「壘」（「るい」あるいは「とりで」）＝（比喩的に）自分だけの世界として他人を容れない場所や領域⁶⁸。

・鷗外の筆法…森鷗外はある議論をする際に、経験則ではなく、何らかの根拠をもとに主張した

例：「妄想⁶⁹」

自然科学を修めて帰った当座、食物の議論が出たので、当時の権威者たる Voit の標準で駁撃した時も、或る先輩が「そんならフォイトを信仰してゐるか」と云ふと、自分はそれに答へて、「必ずしもさうでは無い、姑フォイトの壘に抛つて敵に当るのだ」と云つて、ひどく先輩に冷かされた⁷⁰。

・荷風の壘…11パラグラフの議論

・「金枝篇」の壘…14パラグラフの議論

・「講座派」の壘…16パラグラフの議論

⇒いずれの「壘」も何らかの根拠に基づくもの

● 横光が抛っていたもの

→「文壇の名声と、権力のつくりだした時流」…（相対的に）一時的なものではない

・ほんとうに信じていることと、信じていると信じようとしていることとは、ちがう

→「半可通」であることの批判？

⁶⁸ 「とり - で【砦・寨・壘・取出】」『日本国語大辞典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-02-16)

⁶⁹ 森鷗外の短編小説。1911年に発表。鷗外自身をモデルとする翁の述懐という形式をとった、半生をつづった作品。まずドイツ留学時代を回顧し、自然科学の研究のかたわら、人生に疑問をもって、多くの哲学書をひもといたが、ついに1人の主にもあわなかつたといい、最後に、もっとも大きい未来を有するのはやはり科学であろうと述べている。

磯貝英夫「妄想（森鷗外の小説）」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2022-02-16)

⁷⁰ 森鷗外「妄想」『鷗外近代小説集 5巻』岩波書店（2013）214頁

その後ながく、私は横光氏との最初にして最後のこの出会いを忘れていた。敗戦と占領の後、しばらく経って、横光氏は亡くなった。原因は胃潰瘍の大量出血で、医者にはかからず、おれの病気は科学ではなく精神でなおすといっていたそうである。その話を私は中島健蔵さんから聞き、あらためて横光利一氏はそのまちがった哲学の代価を、自分の生命で支払った、と思った。医者には治すことのできる病気と、治すことのできない病気がある。胃潰瘍は、医者が適当な治療を加えさえすれば、ほとんど確実に治すことのできるものである。中島さんはそのとき、冗談めかしてこういった、「横光はおまえたちが殺したのだぞ。駒場でおまえたちにやられたのが、よほどこたえたらしい。めったに弱音を吐く男ではなかったが、死ぬまえまで、気にしていたぞ」「そうですか」と私はいった、「そんなこととは知りませんでした」「馬鹿野郎、あれだけとちめておいて、知りませんでしたもないもんだ」—しかしその頃の私たちは、横光氏に対してよりも時代に対して、私たち自身をまもるために精いっぱいだった。無名の学生が、あれほど高名な「大家」に、何らかの傷手をあたえ得るだろうとは、想像もしていなかったのである。傷手をあたえることができたとすれば、それは相手が傷手をあたえる必要のない人間だったからであろう。おそらく中島さんは、そのことを巧みに指摘したのだ。傷手をあたえる必要のある人間に傷手をあたえることは、私たちにはできなかった。

● 戦時中、戦後の横光

- ・戦時体制への協力

例：1942 年に亀井勝一郎らと大東亜文学者大会宣言文の起草し宣言文を朗読

大東亜文学者大会 NHK アーカイブス

(https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009180743_00000) 1 分 16 秒

- ・「旅愁」の続きを連載、山形へ疎開
- ・終戦後、「戦争責任者」として糾弾される中で、作品を発表する、古神道の重視という考えは変わらず
- ・1947 年 12 月 30 日、胃潰瘍による腹膜炎により死去

● 終戦後の加藤による横光評価

① 「戦争責任者」として批判

例①「文学検察(五) 横光利一」『文学時標』1946 年 4 月 1 日

- ・戦後も沈黙を続けていること、その思想が抽象的ではあるが論理的ではないこと、戦中の活動が「日本と人民とを『理性の道』の外へ導いた戦争犯罪人の役割」を果たしたことを批判

例②「le 25 janvier, dimanche」『JOURNAL INTIME』(1948) ⁷¹

横光利一死. Bleeding through when ventriculi. He was irrational to live.

(拙訳 胃穿孔。彼は不合理に生きた。)

→横光の「非論理性」が批判の対象となる

同時代の学者・文学者も共感

⁷¹ (https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200020/note_n09/?p=8)

例：中島健蔵の回想

ここに書かれている会話〔「横光はおまえたちが殺したのだぞ…」のこと〕の内容の真偽については、わたくしとしては、不明とっておくよりしかたがない。(……)「文学検察」の加藤周一も痛烈ではあるが、横光利一論としては、もっとも根本的なところにふみこんでいる文章である。横光の「科学」には、わたくしも時々閉口していた。しかも、加藤のような正攻法ではどうにもならない性質のものであった⁷²。

② 「俳人」としての評価

例：Radio Tokio での日本の文学者についての放送用原稿（1959年6月10日）

（前略）

Or, il est évident qu'il était loin de comprendre et la technologie et les situations sociales. Yokomitsu n'était pas un homme, qui comprenait, mais qui sentait, non un écrivain intellectuel, mais un poète sensible.

Avant de le mettre à travailler uniquement à des romans, Yokomitsu avait composé de courts poèmes de Haikai qui sont beaux. Même dans son dernier roman prétendu idéologique, dont l'histoire se déroule en Europe, ce sont les paysages qui comptent: le ciel, les arbres, le brouillard qui descend sur la prairie, les clochettes des troupeaux qu'on entend de loin dans les Alpes...

Les anciens maîtres de Haikai étaient heureux à l'époque de Tokugawa. Mais qu'est ce qui leurserait arrivé s'il, étaient né sa Tokio au milieu du 20 siècle? Voilà ce qu nous montre Yokomitsu. Il n'était pas content de se limiter au cadre des 17 syllabes. Et ce n'est pas seulement sa tragédie individuelle, mais celle de la tradition du Haikai dans le Japon contemporain.

（拙訳）

しかし、技術も社会情勢も理解するにはほど遠い状態であったことは明らかだ。横光は、理解する人ではなく、感じる人であり、知的な作家ではなく、繊細な詩人であった。

横光は、小説ばかりを手がけるようになる以前から、短い俳句を美しく詠んでいた。ヨーロッパを舞台にした、いわゆるイデオロギー小説の最新作でも、空、木々、草原に立ち込める霧、遠くアルプスから聞こえる群れの鐘...といった風景が重視されている。

昔の俳人は、徳川時代には幸せだった。しかし、もし彼が20世紀半ばの東京に生まれていたら、どうなっていたのだろう。それが横光の示すところです。彼は、17音節の枠にとどまることに満足したわけではない。そして、これは彼個人の悲劇ではなく、現代日本の俳諧の伝統の悲劇でもあるのだ。

③ （『羊の歌』以後）「翻訳文学」から生まれた文学者

（前回のレジュメ参照）

⁷² 中島健蔵「昭和の作家群像 12 「共通の広場」の空想」『心』32巻1号（1979）11-12頁

- なぜ、批判的なトーンが薄れたのか？
- ・ 海外体験…フランス留学、ブリティッシュ・コロンビア大学への赴任
- ・ 加藤らの批判に対する横光の反応から？

例：雑誌『人間』の編集長（木村徳三）と中村との会話

私は横光氏の晩年の思想に対する批判を文章にした。それを読んだ横光さんは『人間』の編集長の木村徳三に、私や加藤に大に書かせなさい、とすすめてくれた⁷³。

→単純に批判することへの躊躇？

第19パラグラフ（旧版159頁、改版179～180頁）

横光利一氏は駒場に招かれた客であった。ヒトラー・ユーゲントの一隊は、招かれざる客であった。私たちはみずから招いた客と激論したが、招かれざる客には白眼を以て応じ、相手にもしなかった。彼らは制服を着て、隊伍を整え、足なみをそろえて、駒場の正門にやってきた。まだ童顔の少年たちで、少しかたくなり、人形のように無表情であった。たまたまその場に居合せた数人の学生が、たち振り向いただけで、そのまま、すれちがいに門を出てゆくものもあった。私たちは彼らとの係り合いを拒絶していた。そしてまだ、私たち自身の仲間が銃を握って本郷の大学の正門を出てゆくときが来るだろうということを、予想してはいなかった。

- 構造

その人への興味から招き、論争を交わした客（横光）



興味はなく、無視する対象となる客（ヒトラー・ユーゲント）

- 語句解説

- ・ ヒトラー・ユーゲント

1926年：ナチス党（政権掌握後は第三帝国）の青年組織として設立

1933年：ヒトラー政権成立後、ヒトラー・ユーゲントを家庭や学校に優先する「身体的・精神的・道徳的教育のための組織」と位置づけ、青年層のイデオロギー的・組織的統一を旨とする⁷⁴

- ヒトラー・ユーゲントの来日（1938年）

- ・ 北海道～鹿児島まで、日本各地を訪問

1938年のヒトラー・ユーゲント来日の様子 (<https://collections.usmmm.org/search/catalog/irn1004796>)

- ヒトラー・ユーゲントの一高への来校

- ・ 1938年9月20日に来校⁷⁵

- ・ 一校内でのナチスに対する反応…批判的

⁷³ 中村眞一郎『戦後文学の回想 増補版』筑摩書房（1983）51頁

⁷⁴ 吉田輝夫「ヒトラー・ユーゲント」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（*JapanKnowledge*, <https://japanknowledge.com>）（参照 2021-12-21）

⁷⁵ 「ヒットラー・ユーゲント派遣団東京滞在日程」『JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B04012441100、各国少年団及青年団関係雑件 第二卷(I-1-10-0-4_002)(外務省外交史料館)』（<https://www.jacar.archives.go.jp/das/image/B04012441100>）

例①：同時代の記録

9月20日、来朝中のHJ〔ヒトラー・ユゲント〕15名来校、構内見学の後、講堂で交歓会あり若き日独の代表者が力強く交歓した。この来校に当たりユゲント一行に一高に対する概念の把握されてみなかったのは遺憾だった⁷⁶。

→直接的ではないが、ヒトラー・ユゲントと一高との間に距離感があったことを感じさせる

例②竹山道雄の回想

二十人ほどの白皙の若者がこの空地で自動車を降りて校門を入ろうとしたとき、鉤十字の小旗を手にした出迎えの一高生が、『バカヤロー』と連呼して歓迎の意を表した。規律と清潔と服従を最大の美德として鍛えられたかれらが(……)無精な疎服をまとって底気味わるい薄笑いを浮かべてかたまっている一高生を見て、胆をつぶしたのも当然であった。ましていわんや寮の三回の窓口に大あぐらをかいて棒をふりながら、ドイツ人を案内している教師を『竹山さん、がんばれい!』と弥次るのを見ては、これがStudentかと呆れたのであった。その後、かれらは時の文相荒木大将のお茶の会で、日本で一番印象のよかったのは幼年学校⁷⁷、わかったのは一高、と答えたという。一高生のシニクなだらしのなさ、その客観的印象への無頓着ということの半面には、意外に強靱な秩序の精神があり、たとえば服従ということも何の強制もなくして行われているといったようなことが、一時間ほど校内をみたヒトラーユゲントにわからなかったのは無理もなかった⁷⁸。

→一高生が同時代の社会情勢を拒絶した事例

- ・しかし1938年は、一高にとって戦時体制に取り込まれ始める転換点となる

例：文部省の指令に基づき、南京陥落と武漢陥落の祝賀行進を行う⁷⁹

初めて、一高生から応召者が出る⁸⁰

- ・その後、一高は戦時体制の中に否応なしに取り込まれることとなる

例：1943年に大学、高等専門学校文科系学徒の徴兵猶予が停止される（学徒出陣）

一高生も徴兵され、2年生の文科系クラスの人員が半減するまでに至った⁸¹

⇒加藤が「縮図」で著した時期の一高は、社会に対して独立の精神を示すことができた最後の時期

⁷⁶ 「陵上日記 ヒトラーユゲント来校」『向陵時報』昭和13年10月18日1頁

⁷⁷ 陸軍幼年学校のこと

⁷⁸ 竹山道雄「空知」『縦の木と薔薇』新潮社（1957）100頁

⁷⁹ 一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校自治寮六十年史』一高同窓会（1994）236-237頁

⁸⁰ Ibid., 239頁

⁸¹ Ibid., 267頁

その頃の私は、小説を書こうとして、長い時間を無為のうちに過していた。しかし私が小説だと考えていた形式に適しい話の内容は、私の経験のなかにはなかった。私は女に惚れたこともなかったし、従って裏切られたこともなかった。赤貧洗うが如き経験もなかったし、血湧き肉躍る冒険に身を投じたことはなおさらなかった。そして私が経験し、感動していたことは、到底小説の材料にはなりそうもなかった。私は本を読み、音楽を聞いて感動したし、また坂を転りはじめた車のように、とめどもなく狂ってゆく社会を、傍から眺めながら、つまるところどういう破滅がわれわれを待っているのだろうかと考えていた。しかしそういうことと、文芸とか小説とかいうことの間には、どういう関係もなさそうにみえた。それにも拘らず、私は無理に小説らしいものをつくりあげようとしながら、私の感動や経験と、つくろうとしていた小説の世界とのいちじるしいぐいちがいを、次第に鋭く感じはじめていた。

- 一高時代の加藤周一
 - ・ 庭球部での活動
 - ・ 『向陵時報』、『校友会雑誌』での編集・執筆活動
 - ・ 軽井沢での人々との交友
 - ・ 読書や音楽会に通う⁸²
- 『向陵時報』、『校友会雑誌』での編集・執筆活動
 - ・ 劇評、映画評…「ゴルゴダの丘」など
 - ・ 小説・詩…「小酒宴」、「正月」など**自身の体験をもとにした私小説**
 - ・ 評論…「戦争と文学とに関する断想」のみ

後に、自然主義・私小説を「日本文学の伝統を見失う過程」として批判⁸³

→後の加藤の主張と、当時の文学活動との矛盾を（後年になって）気づく？

→同時代の社会から疎外されていることの自覚

(『朝日ジャーナル』では)

文芸の事に、多くの時間を割きながら、私はそれが天職であると思ったことは一度もない。私は文芸の世界に半ば踏み込もうとしながら、局外者であった。小学生の私が教室でそうであったように。また高等学校の私が庭球部の部屋においてそうであったように。そしておそらくは太平洋戦争の日本帝国においても私がそうであるだろうように⁸⁴。

⇒同時代の社会に対峙する知識人をめぐる状況の「縮図」

⁸² 『青春ノート』にこうした経験が書かれている。

⁸³ 加藤周一「日本文学の伝統」『東京新聞』1947年12月3日2頁

⁸⁴ 「羊の歌 14 縮図」『朝日ジャーナル』1967年2月12日号、117頁